

# 名古屋の古道・街道

池田 誠一

## 【6】岡崎街道…平針口から荒池へ

### 1 家康が直々につくった道

名古屋城は、関ヶ原の戦いの後、西の豊臣方との戦いに備えて清須城を移したものであることは良く知られています。

城は、家康の意見で周りに湿地帯を持つ名古屋台地の西北角に造られました。構想では堀の外3<sup>キロメートル</sup>を巡る庄内川を天然の堀として、さらには20<sup>キロメートル</sup>も先の木曾川もその輪に取り入れていたといえます。

援軍の駐留や兵員・物資の補給線も必要でした。前者に対しては街道沿いに大規模な寺町が考えられました。後者に対しては熱田からの東海道と大曾根からの善光寺街道がありましたが、中心となる三河、岡崎方向からのアクセスが弱かったのでしょう。

1612年春、家康自らが岡崎から名古屋に向かって最短ルートを作るべく探査に出たのです。堤(豊田市)を通り、境川を渡り、平針(天白区)の平子山まで来ました。ここには足助や拳母へ行く道が近くを通過していたのでしょう。そこで家康は当時その少し北にあった平針村の長を呼び、村全体をその位置に移動させ、伝馬役を命じました。(代りに村の菩提寺等が再建されました。)ここに、「神君」家康自らが先導した道が

でき、大坂の陣では多くの軍勢が駆け抜けました。こうしてできた道が、尾張藩の管理した道(藩道)の2番目、「岡崎街道」です。(図1)

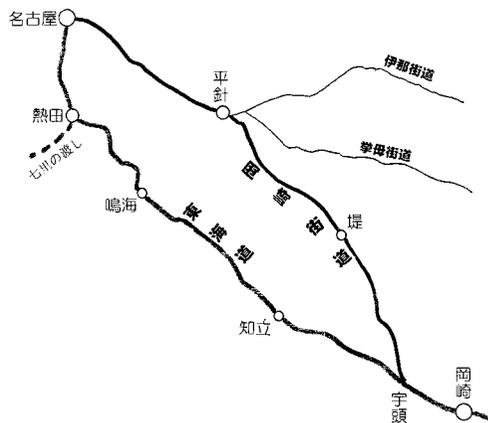


図1 岡崎街道と東海道

### 2 もう一つの東海道バイパス…岡崎街道

#### (1) 岡崎街道

この道の起点は、伝馬制度を考えると木曾街道などと同じく本町通伝馬町筋の角、札の辻だったといえます。そこから少し東に進み、東南に向きを変えます。そして城下の五口の一つ、三河口を出て、真直ぐに川名、八事を通して平

針宿に達します。ここからも東南に、白土、祐福寺を過ぎて堤にも宿場がつけられました。そして、さらに東南に向かい岡崎の手前、宇頭で東海道に合流しました。岡崎から名古屋に直進する東海道バイパスといえます。

宿場は平針と堤の2宿で、人馬の継ぎ立ては25人25疋でした。戦前まではところどころに松並木が残っていたといいますが、戦時に工業用の燃料に切られてしまったそうです。

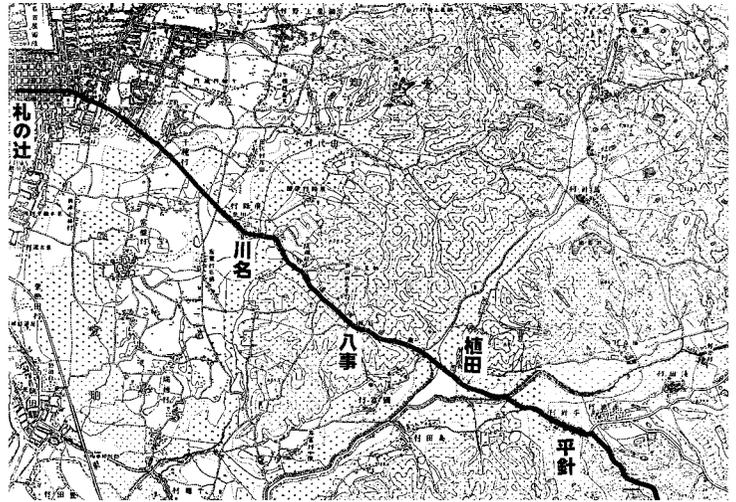


図2 市内の岡崎街道(明治21年)

## (2) 飯田街道では？

この道は岡崎から名古屋城を最短で結ぶためにつくられたものです。今では名古屋から平針の部分は「飯田街道」と呼ばれることが多くなっていますが、これは明治時代以降のこのことです。江戸時代には公的には岡崎街道でしたが、一般には「駿河街道」とか、出口の町の名が駿河町だったため「駿河町街道」などと呼んだようです。また、三河では「新街道」とか、熱田への「宮道」とも呼んでいました。

て飯田街道と呼ばれる道を進みます。吹上、川名を通り山中へ。杖中は北側の旧道を通り八事へ。八事交差点では真直ぐの旧道に入り、坂を降り下って塩釜口へ。そこからは拡幅された旧153号線に沿って天白川を渡り平針西口へ。ここからは旧道のまた旧道を通り平針の中心部に出ます。平針の東でも左に旧道の旧道に入り、東に進み旧道に出、少し行くと新道に合流します。そのあとは少し右に外れますが概ね県道沿いに白土に向かっていきます。(図2)

## (3) 名古屋の岡崎街道

市内を細かくたどってみます。街道は札の辻から伝馬町筋を東に向かい、東南に向きを変え

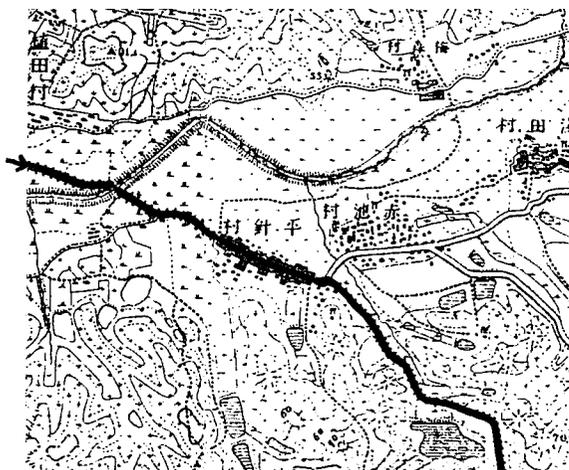


図3 平針宿付近(明治21年)

## 3 平針口から荒池

岡崎街道のうち、飯田街道と呼ばれる部分はまた取り上げる機会があると思いますので、今回は家康の故事の有る平針付近を歩く事にします。(図3)

地下鉄鶴舞線原駅を下車し、200mほど南に行った平針西口からスタートします。まず、交差点の西角の木の下に昔の道標があります。地蔵が彫られた石碑の右側には「なごや道」、左側には「みやいせ道」とあり、ここが熱田へ行く道との分岐点であったことが分ります。

さて街道は、交差点の東側、新道に沿って300mほどの所を右に入ります。少し行くと第二環状線の用地を横切ります。家康の命によって移動する前の平針村は



あつた、なごやの分岐点の碑



新道から・右、旧道の旧道に入る

この北北東200<sup>メートル</sup>位、現在の郷の島公園(戦国時代の城跡)の辺りだったといえます。

街道は緩やかに登りつつ、旧道へ飛び出します。ここはもう平針宿の西側になります。

\*

平針宿の本陣は、今は公民館になっている所で、辺りには古い家屋等も残っています。問屋場や脇本陣もあったといいますが、もう分かりません。

街道を東に進んで交差点を右に少し行くと、家康によって再建されたという秀伝寺があります。その後の平針の繁栄を示すかのような立派な構えです。街道に戻って東に進むと、次の交差点は現在足助方面との分岐点です。その手前に昭和の始めころまでは一里塚が残っていたといえます。街道は、その交差点を過ぎてすぐを左に入る旧道の

旧道です。

その曲がり角のすぐ右向こうに慈眼寺と針名神社の石柱があります。坂を登っていくと広場に出ますが、左の階段を登ると秋葉山慈眼寺です。曹洞宗のお寺ですが、秋葉神社も兼ねた神仏混交のお寺です。歴史は古く9世紀の創建で、信長が桶狭間の戦いに戦勝祈願をしたといえます。寺の正面の道を進むと、針名神社があります。この神社も創建は古く、10世紀の延喜式に名前が出ているいわゆる式内社です。江戸時代、平針村の移転に伴ってこの地に移されました。市内とは思えないうっそうとした森の中を元の街道に戻ります。

\*

さて、先ほどの旧道の旧道に入ると道はすぐ東に向きを変え、周囲も急に街道らしくなります。わずか200<sup>メートル</sup>位で道は旧道に飛び出してし



平針宿の本陣付近



秀伝寺

まい、少し行くと車の行き交う新道に合流します。

街道はしばらく新道の歩道の辺りを進んだ後、また右に分かれ、薔薇館という喫茶店の横を通ります。そして区画整理中の地域の中にわずかに残されたかわいい古道を通ります。谷があって道が迂回していたため残ったのでしょうか。この道もあと何ヶ月あるのでしょうか。新道に戻った道は大きく左にカーブしつつ日進市に入ります。



神仏混交の秋葉山慈眼寺

#### 4 正真正銘の「姫街道」?

この街道は、姫街道と呼ばれることがあります。各地に姫街道と呼ばれる街道がありますが、良く知られているのは、東海道の浜名湖付近にある本坂越えと呼ばれるバイパスで、ここには古い道という意味の「ひね」街道が元ともいわれます。中山道はお姫様が大名行列の多い東海道をさけてよく通ったから、前に歩いた佐屋路は七里の渡しを避けて女の人がよく通ったから、共に姫街道といわれます。

平針街道は、家康自らがこの道を「東海道姫街道」と書いたといえます。軍事目的で作られた道を、それを隠して、かわいい「姫」という言葉を使ったのでしょうか。

軍事目的で作られた道は、平和の時代になると共にその意味が薄らぎます。けれども平針は、



平針東の街道(旧道の旧道)

信州飯田や熱田への道との結節点であり、そこに宿場としてのメリットが生きて、長く栄えたのではないのでしょうか。

夏草の かげに消えゆく 姫古道

〈参考文献〉

- ① 隅田庄太郎編集「天白村誌」(1956、天白村誌刊行会)
- ② 浅井金松「天白区の歴史」(1983、愛知県郷土資料刊行会)
- ③ 大林淳男他監修「三河の街道と宿場」(1997、郷土出版社)



式内社の針名神社



わずかに残った姫・古道